慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国朝鮮族高校生の朝鮮語書きことばに関する一考察
Sub Title	Written language of Korean-Chinese high school students
Author	髙木, 丈也(Takagi, Takeya)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.14, (2017.) ,p.27- 41
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20170000-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国朝鮮族高校生の
朝鮮語書きことばに関する一考察

髙　木　丈　也

１．はじめに

中国東北地方には、日常の言語生活において朝鮮語を使用する人々が多く居住している[1]。彼らは、中国の少数民族政策で朝鮮族と呼ばれる民族で、主に19世紀中葉から20世紀初頭にかけて貧困や戦乱、日本による支配などを理由に朝鮮半島から移住した人々の末裔である。現在、朝鮮族社会は、移住第３～５世代が大部分を占めており、主に民族語である中国朝鮮語と国語である漢語（中国語）による二重言語使用を行なっているが、彼らの朝鮮語能力は、移住第１、２世代に比べ、相対的に低くなっていることが知られている。

本稿は、こうした状況を踏まえ、同時代の朝鮮族の言語使用の一端を解明すべく、朝鮮族高校の学生による書きことば資料を分析するものである。本稿の分析により、これまでほとんど明らかされてこなかった朝鮮族若年層における文語使用の実態が明らかになるばかりか、それらが中国朝鮮語の規範や他言語、他変種との関係において、いかなる特徴をみせるものであるかを解明することも可能になると期待される。

２．研究の枠組み

２.１　調査の概要

本稿では、朝鮮族高校[2]に通う学生（移住世代から数えて、４、５世代目の生え抜き）が使用する書きことばとしての朝鮮語を分析するが、その対象となる言語資料は以下の２つである：

［資料Ａ］　筆者が2016年８、９月に吉林省延吉、長白、長春、通化、遼寧省桓仁の朝鮮族高校で実施した言語使用、意識を問う質問紙調査の中でも、とりわけ記述回答の部分にみられる朝鮮語[3]。

［資料Ｂ］　2016年秋に吉林省 延吉の高校で実施された「글짓기 대회」（作文大会）にエントリーした作品にみられる朝鮮語。

上記の２つの資料を収集した地点、および被験者の情報は、以下のとおりである[4]：

【表１】調査地点

都市名			学校名	開校年	収集資料
	漢語表記	朝鮮語表記			
延吉	延吉	연길	吉林省延辺第一中学	1952年	資料A、B
長白	长白	장백	長白朝鮮族自治県第二中学	1946年	資料A
長春	长春	장춘	長春市朝鮮族中学	1956年	資料A
通化	通化	통화	通化市朝鮮族学校	1945年	資料A
桓仁	桓仁	환인	桓仁満族自治県朝鮮族学校	1957年	資料A

【表２】被験者の情報

		資料A					資料B	合計
		延吉	長白	長春	通化	桓仁	延吉	
14歳	男	1人	0人	3人	0人	6人	—	10人
	女	8人	1人	9人	4人	4人	—	26人
15歳	男	17人	6人	14人	10人	3人	8人	58人
	女	50人	22人	37人	25人	3人	13人	150人
16歳	男	15人	13人	18人	13人	6人	17人	82人
	女	18人	28人	17人	16人	9人	27人	115人
17歳	男	1人	9人	2人	1人	7人	—	20人
	女	1人	16人	3人	0人	9人	—	29人
18歳	男	0人	4人	0人	0人	2人	—	6人
	女	0人	0人	0人	0人	4人	—	4人
合計		111人	99人	103人	69人	53人	65人	500人

２.２　分析の枠組み

本稿では、朝鮮族高校生の朝鮮語書ことばに関する分析を行なうにあたって、「誤用」と「特徴」という２つの観点を取り入れる。前者は、中国朝鮮語の言語規範に照らしたとき、形態論、語用論的に非規範的とされるもので、その解釈の根拠は、調査当時、規範として通用していた『조선말규범집』（중국조선어사정위원회、2007年）のうち、「조선말맞춤법」、「조선말띄여쓰기」、「조선말문장부호법」の各項に求める[5]。また、後者は、中国朝鮮語の言語規範に照らしたときには、必ずしも非規範的と断定されるものではないが、言語使用上、揺れがみられるもの、他変種や話しことばの影響を受けているものを指す。

また、言語名について、本稿では、以下のように区別して用いることにする：

・朝鮮語：朝鮮民族の言語の総称。
・中国朝鮮語[6]：中国で朝鮮族によって使用される朝鮮語の総称。現行の規範は、『조선말규범집』（중국조선어사정위원회、2016年）。
・韓国語：韓国で韓国人によって使用される朝鮮語の総称。現行の規範は、『표준어규정』（문교부、1988年）
・漢語：中国で漢族をはじめとする中国人によって使用される言語の総称。日本で一般に「中国語」と称される中国の第1公用語。

3．分析

本章では、実際の言語資料をもとに、朝鮮族高校生の書きことばにおける朝鮮語の誤用、特徴を分析することにする。

3.1　誤用分析

本節では、『조선말규범집』（중국조선어 사정위원회（2007））に照らしたときに誤用と判断される言語使用のうちいくつかを（1）変種的誤用、（2）韓国語からの影響による誤用、という観点から分析していく。

3.1.1　変種的誤用

変種的誤用としては、字母、分かち書き、語彙、助詞、活用形、文・テクストにおける例が確認された[7]。

3.1.1.1　字母

字母の表記の誤用には、初声に対する字母、中声に対する字母、終声に対する字母（パッチム）、子音同化における誤表記という4種が確認された。

まず、初声に対する字母の誤表記としては、以下のようなものがみられた[8]：

［例1］
（1）　정지인［→치］<A延>
（2）　부모와 대화할대［→때］<A春>
（3）　꺽어본것이 많으니…［→격］<A白>

(1) は激音を平音で表記した例、(2) は濃音を平音で表記した例、(3) は平音を濃音で表記した例である。

次に、中声に対する字母における誤表記としては、以下のようなものがみられた：

［例２］

(1)　공공정소애서…［→에］<A 延>

(2)　세상을 외곡하지만…［→왜］<B>

(3)　조선족운…［→은］<A 白>

これらは発音が類似した母音を混同して表記した例である。中声の誤表記においては、音価が類似した母音による混同や、(3) のように順行同化による誤表記が複数みられたため、実際に発音する通りに表記した学生が多かったであろうことが推測される。

また、終声に対する字母（パッチム）における誤表記としては、以下のようなものがみられた：

［例３］

(1)　어렸습니다.［→렵］<A 白>

(2)　성생이라 부른다.［→선］<A 春>

(3)　택시를 탓을때.［→탔］<A 延>

(1) は口音の終声（[p]、[t]、[k]）の混同によるパッチムの誤表記、(2) は鼻音の終声（[m]、[n]、[ŋ]）の混同によるパッチムの誤表記、(3) は二重パッチムの誤表記の例である。このうち (1) (2) については、音価が類似した子音字母による誤表記であったため、やはり実際に発音する通りに表記した学生が多かったであろうことが推測される。

最後に子音同化に関する誤表記としては、以下のようなものがみられた：

［例４］

(1)　석거서 말합니다.［→섞어］<A 通>

(2)　조금 다름니다.［→름］<A 延>

(3)　엄척 많다.［→청］<A 桓>

(1) は連音化における誤表記、(2) は口音の鼻音化における誤表記、(3) は実際には起こらない子音同化（口音の鼻音化）を過剰に表記に適用させた例である。子音同化に関する誤表記

は、音韻論的特徴のほかに形態論的境界の位置に対する認識が大きく関わっているため、その要因を一概に決めることは困難であるが、上記のような例をみたとき、被験者群は話しことば優勢の言語能力を有しており、任意の「音」に対応する「文字」の算出に困難を感じていることが窺える。

3.1.1.2　分かち書き

分かち書きの誤用としては、本来、分かち書きをすべき箇所でしていないものが確認された。特に連体形＋体言、代名詞＋体言、副詞＋用言の例が特徴的である：

［例５］
(1)　**친한친구**와 대화할때［→친한 친구］<A 延>
(2)　**우리반은** 이미 **그전에** 있었던…［→우리 반은／그 전에］<B>
(3)　**잘알아들을수** 있지만 잘 말할수없다.［→잘 알아들을수］<A 桓>

文節の切れ目における分かち書きについては、「조선말띄여쓰기」第２章 第11項に「自立的な動詞や形容詞は、前後の単語と分けて書くことを原則とする」（筆者訳）との規則がみられるが、(1) では分かち書きをしていないことがわかる。また、代名詞の分かち書きについては、「조선말띄여쓰기」第１章 第９項に「代名詞は後の単語と原則的に分けて書く」（筆者訳）との規定がみられるが、これも (2) のように分かち書きをしない例が確認された。さらに、副詞の分かち書きについては、「조선말띄여쓰기」第３章 第16項に「副詞は後の単語と分けて書く」（筆者訳）との規定がみられるが、これもやはり (3) のように分かち書きをしない例が確認された[9]。

3.1.1.3　語彙

語彙における誤用としては、以下のようなものが確認された（ここでは主に形態論的な誤用をみる）：

［例６］
(1)　우리 말보다 **빨리다**.［→빨리 한다］<A 桓>
(2)　60,70대 사람들이 하는 조선어는 아주 **믿음스럽고** 류리합니다.
　　［→믿음직스럽고］<A 白>

(1) は語彙の品詞同定における誤用、(2) は語彙形態素の一部欠落による誤用である。

3.1.1.4　助詞

助詞[10]の誤用には、形態、格、不使用、過剰使用という４種が確認された。

まず、体言と助詞の結合における形態論的誤用としては、以下のようなものがみられた：

［例７］

(1)　한국어을 잘하면…［→를］<A 通>

(2)　조문로 하는게 편리하고…［→으로］<A 白>

(1) は対格助詞、(2) は具格助詞における誤用である。例をみると、いずれも前接する母音体言／子音体言によって区別される形態論的規則から逸脱した結合をしていることがわかるだろう。

次に、助詞の格における誤用としては、以下のようなものがみられた：

［例８］

(1)　부끄럽고 마음에서 좀 불편합니다.［→이］<A 桓>

(2)　조선말이 잘합니다.［→을］<A 白>

(1) は主格助詞、(2) は対格助詞に対する誤用である。

また、助詞が使用されなかった例としては、以下のようなものがみられた：

［例９］

(1)　조선말φ 한족말φ 결합하여 말한다.［→과／을］<A 白>

(2)　북조선의 조선어φ 사투리φ 많다.［→에는／가］<A 延>

(1) は共格助詞、対格助詞に対する誤用、(2) は向格助詞＋特殊格助詞、主格助詞に対する誤用であるが、そもそも格表示がほぼされていないことがわかる。このような誤用は、明示的な格表示マーカーを持たない漢語の影響を受けたものであると考えられる。

最後に助詞を過剰使用する例としては、以下のようなものがみられた：

［例10］

(1)　우리와의 말투가 조금 달라…［→φ］<A 延>

(2)　가족와（→과）쇼핑랑때［→할］<A 桓>

(1) は、助詞を不必要な位置に挿入したものである。(2) は、用言の連体形にすべきところを助詞で書いた例である。

以上のような誤用は、いわゆる母語として韓国語を使用するモノリンガル話者の誤用とは大きく異なるものであり、むしろ漢語を母語とする朝鮮語学習者の中間言語（interlanguage）に相通ずる要素を含んでいるといえる。このように移住第４、５世代の被験者群にあっては、その朝鮮語使用に漢語の影響がかなり及んでおり、助詞の使用はその最たるものであるといえよう。

3.1.1.5　活用形

活用形の誤用には、終止形、連体形、その他の活用形における誤用が確認された（ここでは、主に形態、統語論レベルにおける誤用をみることにする)。

まず、用言＋終止形における誤用としては、以下のようなものが確認された：

[例11]

(1)　많이 사용하다. [→사용한다] <A 桓>

(2)　알아듣기 어려운다. [→어렵다] <A 白>

例をみると、下称の終止形において、(1) は動詞を形容詞型で活用していること、(2) は形容詞を連体形と同形に活用していることがわかる。

次に、用言＋連体形における誤用としては、以下のようなものが確認された：

[例12]

(1)　못 들는 명언 [→듣는] <A 白>

(2)　한어를 쓰을 인구 [→쓸] <A 延>

(1) は現在連体形、(2) は未実現連体形に関わる誤用である。

最後に終止形、連体形以外の活用形における誤用としては、以下のようなものが確認された[11]：

[例13]

(1)　조선어를 잘배워면… [→배우면] <A 桓>

(2)　쓰지 안 하다. [→쓰지 않는다] <A 桓>

(1) は第Ⅱ語基[12]の形態における誤用、(2) は否定形における誤用である。

3.1.1.6　文・テクスト

文・テクストの誤用には、文のねじれ、スピーチレベルの不一致、質問に対する回答という３種が確認された。

まず、文のねじれ、すなわち文構造レベルにおける誤用としては、以下のような例がみられた：

［例14］
…왜냐하면 한족이 조선족보다 더 많고 그들은 조선어를 알아 듣지 못한다.
［→왜냐하면 ～알아듣지 못하기 때문이다］＜A 延＞

これは、理由表現の呼応における文のねじれの例である。

次に、文章中のスピーチレベル（speech level）が一致しない場合の例をみてみよう：

［例15］
있습니다. 한국어 (는) 대부분은 (→이) 영어발음이기때문에 조금 알아듣기 어렵다.
［→있다］＜A 春＞

上の例では、上称と下称という異なる文体が同一のテクスト内に混在していることがわかる。

さらに、質問に対する回答が不適格な例もみられた。質問文と回答文を共に示す：

［例16］
Q：韓国语를 들을 때, 알아듣기 어렵거나, 이해하기 어려운 부분이 있습니까？
　　또 본인은 이러한 부분에 대해 적극적으로 공부하고 싶습니까？
A：싶습니다. ［→공부하고 싶습니다］＜A 通＞

この例では、回答において著しい省略をみせていることがわかる。

3.1.2　韓国語からの影響による誤用

韓国語からの影響を受けた誤用としては、字母、分かち書き、活用形における例が確認された。

3.1.2.1　字母

韓国語からの影響を受けた字母の誤用としては、初声の字母に対する表記が特徴的である：

［例17］

(1)　a．웹사이트［→싸］<A 延>

　　b．라디오방송［→지］<B>

(2)　a．예를 들어［→례］<A 延>

　　b．여자［→녀］<A 通>

(1) は韓国語の外来語表記の影響を受けた例、(2) は韓国語の正書法にみられる頭音法則の影響を受けた例である。

3.1.2.2　分かち書き

韓国語からの影響を受けた分かち書きの誤用としては、過剰に分かち書きをしたものが確認された。具体的には、連体形の後の形式名詞[13]の分かち書きが特徴的である：

［例18］

朝鮮语로 하는 게 편할 때는 여러 사람들과 대화할 때, 汉语로 하는게 편할 때는 없는듯 합니다.［→하는게／편할때／대화할때］<A 延>

「조선말띄여쓰기」第 1 章 第 4 項をみると、「不完全名詞は前の単語に付けて書く」（筆者訳）との規則がみられるが、上の例では、当該要素が分かち書きされていることがわかる。こうした誤用は、それを分かち書きする韓国語の正書法の影響を受けたものであると思われる。

3.1.2.3　活用形

韓国語からの影響を受けた活用形の誤用には、以下のようなものが確認された：

［例19］

(1)　큰 영향이 되어…［→되여］<A 延>

(2)　왜 이정도밖에 안될까.［→안될가］<B>

(1) は、되다の第Ⅲ語基＋φという形で現れた接続形（連用形）であるが、本来「되여」となるべきところ、韓国語の活用形の影響を受け、「되어」という形が現れている。さらに、

(2) は終止形で、やはり語尾の一部が韓国語の正書法の影響を受けて表記されたものである。

3.2　特徴分析

本節では、中国朝鮮語の言語規範に照らしたときには、必ずしも非規範的と断定されるものではないが、言語使用上、揺れがみられるもの、他変種や話しことばの影響を受けているものなどを広く取り上げ、分析資料の特性に接近することにする。具体的には、(1) 変種的特徴、(2) 漢語からの影響による特徴、という観点から分析していく。

3.2.1　変種的特徴

変種的特徴としては、中国朝鮮語に特徴的な語彙、話しことばの使用といった例が確認された。

3.2.1.1　中国朝鮮語に特徴的な語彙

中国朝鮮語に特徴的な語彙としては、以下のようなものが確認された（[例23] までの [　] は対応する韓国語）：

[例20]
(1)　친구와 합 (→함) 께！**자기절로** 말한다. [알아서] <A 春>
(2)　**남새**를 가득 실은 트럭이… [야채] <B>

また、韓国語でも使用されるが、使用域が異なると判断される語彙には、以下のようなものが確認された：

[例21]
(1)　중국에서 **낳고** 중국에서 자라고 앞으로도 중국에서 발전할것이다.
　　[(태어) 나고] <A 桓>
(2)　설에 한국에 가서 음식 사먹을때 한국말 **잘할** 기회가 있습니다.
　　[자주 할] <A 通>

続いて、単語結合において韓国語と異なる特徴をみせるものには、以下のようなものが確認された：

［例22］

(1)　단어량이 아주 크다.［어휘력이／풍부하다］<A 春>

(2)　축구를 찰때에.［축구를 할］<A 白>

さらに、疑問詞が平叙文で用いられて、不定の意味を表す例として、以下のようなものが確認された：

［例23］

(1)　나가서 놀때, 어느 사람이 신을 밟을때 조선어로 욕하기…ㅠㅠ.
　　［어떤］<A 春>

(2)　이야기 나눌때 조선어가 편하고 무엇을 해석할때 한어가 더 편하다.
　　［무언가를］<A 通>

3.2.1.2　話しことばの使用

書きことばにおいて話しことばの語形を使用している例としては、以下のようなものが確認された：

［例24］

(1)　이쁘지 않은 말［→예쁘지］<A 延>

(2)　중국에서 살고 있으니깐.［→있으니까］<A 延>

話しことばの語形の中には、以下のような方言形が使用された例も確認された：

［例25］

(1)　조선족까 말할때…［→과］<A 延>

(2)　어떨때에는 잘 알아듣지 못함다.［→못합니다］<A 延>

(1) は共格助詞、(2) は終止形語尾のそれぞれ方言形が現れた例である。

3.2.2　漢語からの影響による特徴

漢語からの影響を受けた特徴としては、語彙の借用、漢字併用における例が確認された。

3.2.2.1　語彙の借用

語彙レベルにおける漢語からの影響としては、1）漢語の単語を朝鮮語の漢字音読法により音訳したもの、2）漢語の単語を音借したもの、3）漢語の単語を意訳したもの、4）漢語の単語を半音訳・半意訳したものがあることが知られているが（김기종（1990））、今回の書きことばの調査では、1）の使用が多く確認された。漢語語彙を朝鮮漢字音に音訳したものとしては、以下のようなものが確認された：

［例26］
（1）　감정정서가 **부동합니다**.【不同一】［→다릅니다］＜A 延＞
（2）　**기본상** 한어로 쓰는것이 더 편합니다.【基本上】［→기본적으로］＜A 延＞

（1）は形容詞、（2）は副詞の例である。このような音訳は、この他にも多くの例が確認された[14]。なお、髙木（2015）の中国朝鮮語（延辺地域語、遼寧省地域語）の談話調査では、漢語の単語を音借した語彙（例：电视（テレビ）→ 덴스、上班儿（出勤する）→ 쌍발하다）も多く確認されたが、書きことばを対象とした本調査においては、上课（授業に出る）→ 상가／상과（＜ shàngkè）、掌握（マスターする）→ 장와／장워（＜ zhǎngwò）程度しか確認されなかった（なお、上课は상과、掌握は장악のように朝鮮漢字音による音訳の出現も確認されている）。

3.2.2.2　漢語の併用

朝鮮語と漢語を併用した例としては、以下のようなものが確認された：

［例27］
（1）　**声调**에서 차이가 있습니다.［→성조］＜A 延＞
（2）　어투나 **专有名词** 방면에서 차이를 느낀다.［→고유명사］＜A 延＞

（1）は朝鮮語と漢語において同一の漢字を使用する語彙であるため、両言語が併用された表記であるとみることも可能である。しかし、その一方で（2）の場合は、朝鮮語と漢語で異なる漢字により構成される語彙であるため、意図的に漢語の語彙を使用したものと判断される。

また、以下のように文レベルでの言語の切り替えが起こるような例も確認された：

［例28］
북조선의 조선어 사투리많다. **语调强烈**。［→어조가 세다］＜A 延＞

４． 結論

本稿では、朝鮮族高校生の朝鮮語の誤用と特徴について、書きことば資料をもとに分析を行なった。分析の結果、誤用については、変種的誤用と韓国語からの影響による誤用に大分され、前者には字母、分かち書き、語彙、助詞、活用形、文・テクストにおける誤用が、後者には字母、分かち書き、活用形における誤用が確認されることがわかった。また、特徴については、変種的特徴と漢語からの影響による特徴に大分され、前者には中国朝鮮語に特徴的な語彙、話しことばの使用における特徴が、後者には語彙の借用、漢語の併用における特徴が確認されることがわかった。一連の分析により、同時代の朝鮮族学生の朝鮮語使用は、同じ民族語、母語でありながらも、モノリンガルとしての韓国語話者の誤用とは大きく異なることが確認されたが、このような差異が生じる要因としては、朝鮮族高校生にあっては、他言語や他変種（漢語や韓国語）からの影響が常に存在すること、彼らが朝鮮語を話しことば優勢の言語として位置づけており、書きことば使用における能力が相対的に低いことなどが関わっていることが示唆された。

本稿の分析により、同時代の朝鮮族高校生の言語使用の実情がある程度明らかになったといえるが、そもそも本調査は、その記述内容が限定的なものであったうえ、分析も基礎的な用例の整理に留まったため、誤用を生成する要因や、地域差などの詳細な分析をするには至らなかった。また、本調査で得られた用例は、個人方言（idiolect）である可能性も排除はできない。今後は、こうした本稿の課題をふまえ、質的、量的な側面からより詳細な分析を行なっていく必要があると考える。

【謝辞】

本論文の執筆にあたり、匿名の査読者の先生方には、貴重なご意見を賜りました。また、この他にも慶應義塾大学 総合政策学部の金泰仁先生には韓国語話者の立場からご助言をいただき、レインボー通商 宮川淳代表には、調査に際して様々な便宜を図っていただきました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

参考文献

菅野裕臣（1988）「文法概説」菅野裕臣他編『コスモス朝和辞典』白水社

金美善（2001）「大阪市生野区周辺の在日コリアン一世の混用コード」社会言語科学会第８回研究大会予稿集

髙木丈也（2015）「延辺地域朝鮮語における友人談話の発話形式―文末形式におけるソウル方言との比較から―」『韓国語学年報』11 神田外語大学

髙木丈也（2016）「遼寧省地域朝鮮語における友人談話の発話形式―基層方言との関係という観点から―」『朝鮮学報』241 朝鮮学会

김기종（1990）「중국에서의 조선어 어휘규범화작업」『어학연구』26-1 서울대학교 언어교육원

김영수（2009）「오류현상으로 본 한국어교육에서의 문제점과 대안연구」『조선-한국언어문학연구７』연변대학 조선언어문학학과 민족출판사

다카기 다케야（2017）「중국조선족４，５세의 언어사용과 언어의식―설문지조사의 분석을 중심으로―」The 13th ISKS 발표요지

동북조선민족교육과학연구소（1997）『중국조선족학교지』동북조선민족교육출판사

문교부（1988）『표준어규정』

연변사회과학원 언어연구소（2009）『조선말소사전』（2009년３차 개정판）흑룡강 조선민족출판사

중국조선어사정위원회（2007）『조선말규범집』연변인민출판사

중국조선어사정위원회（2016）『조선말규범집』연변교육출판사

최순희（2007）「중국인 한국어 학습자의 어휘 오류 분석과 교재 개발」『조선-한국언어문학연구４』연변대학 조선언어문학학과 민족출판사

호취월（2007）「중국어가 중국 학생들의 한국어 학습에 대한 부작용」『조선-한국언어문학연구６』연변대학 조선언어문학학과 민족출판사

国务院人口普查办公室，国家统计局人口和社会科技统计司（2012）『中国2010年人口普查资料』中国统计出版社

注

1 『中国2010年人口普查资料』（第６回人口センサス）によると、朝鮮族の総人口は約183万人である。

2 日本の高等学校に相当する教育機関を漢語（中国語）では「（高級）中学」（(gāojí) zhōngxué）と称するが、混同を避けるために、本稿では、日本語の「高校」との名称を採用する。なお、高校を調査地としたのは、将来の朝鮮族社会の担い手である同世代を分析することにより、中長期的な言語使用の推移も視野に入れたいと考えたからである。

3 質問紙調査の内容に関しては、다카기（2017）を参照のこと。

4 【表１】の学校の開校年は、동북조선민족교육과학연구소（1997）による。また、【表２】の年齢は、調査日基準の満年齢により示している（被験者の選定にあたっては、調査時の学生の在籍状況による影響を受けざるをえないため、年齢、性別には、ばらつきがある）。

[5] 語彙の表記に関しては、연변사회과학원 언어연구소（2009）の記述も参照する。ところで、現代通用する中国朝鮮語の言語規範の基礎が築かれたのは、1977年に「동북３성조선어문사업협의소조」（東北３省朝鮮語文事業協議小組）が設立されてからである。最も早い規範集（正書法）は1977年に制定され、その後も約10年おきに1985年、1996年、2007年、2016年に改訂が行なわれてきた。ただし、最新の2016年版は、12月に発表されており、本調査の実施時点（2016年夏、秋）においては、まだ通用していなかったため、本稿では、2007年の版に依拠して分析を行なうことにする。

[6] ただし、本稿では、便宜上、文脈によりその意味が明確な時には、方言学における言語記述の習慣に基づき「中国朝鮮語」を「朝鮮語」と称することもある。

[7] 本稿では、諸般の制約から各種誤用の生成要因については、部分的に扱うに留めることにする（なお、調査の性質上、「誤用」と「単純ミス」の区別もしないことにする）。なお、漢語が朝鮮語習得に与える影響を考察したものとしては、김영수（2009）、최순희（2007）、호취월（2007）を参照（いずれも漢族＝漢語話者の朝鮮語習得に関する誤用分析である）。

[8] 本稿で提示する用例は、被験者が調査票に記した表記をそのまま転写したものである。提示に際しては、本文中で分析対象となる箇所を**ゴシック・ボールド（網掛け）**にし、中国朝鮮語の書きことばにおける規範的な表記は、用例の後に［→ ］により示す（ただし、分析対象箇所以外であっても明らかな誤用が認められた場合には、読者の便宜を図るため、（→ ）により修正例を提示することがある）。なお、各用例には、それがどの調査地点において現れたものであるかも併記するが、資料Ａについては、以下の略号を用いることにする：延吉＝<A延>、長白＝<A白>、長春＝<A春>、通化＝<A通>、桓仁＝<A桓>

[9] (3) は副詞「잘」が後続する用言と付けて書かれた例であるが、「시간이더」のように副詞が前の文節に付けて書かれた例も確認された。

[10] 本稿では、助詞の格に関する範疇は、菅野（1988）に従うことにする。

[11] 接続形に関する誤用は、終止形、連体形のそれに比べて少なかった。

[12] 語基は、用言語幹の活用形で第Ⅰ語基、第Ⅱ語基、第Ⅲ語基の３つの形を持つ。この語基という概念に関しては、菅野（1988）を参照。

[13] 単独で用いられず、必ず前に何らかの要素を伴わなければ生起することができない名詞。中国や北朝鮮の朝鮮語学では불완전명사（不完全名詞）、韓国の国語学では의존명사（依存名詞）と称される。

[14] こうした漢語語彙の朝鮮漢字音への音訳が多いことは、１つには1950年代末に台頭した「共通成分増加論」（漢語からの語彙の音訳を多くし、各民族間の言語の差異を小さくするという方針）によるところが大きい。なお、この他にも本稿では分析の対象としていないが、同時代の中国朝鮮語では、（特に話しことばにおいて）日本語、ロシア語、英語などに由来する広義の借用語が用いられており、多言語の影響を強く受けた変種であるといえる。ところで、「～하다」による生産的な動詞、形容詞の生成は、髙木（2016）における中国朝鮮語の分析のほか、金美善（2001）における記述も参照。